



山口大学共同獣医学部同窓会

青山会

会報 第二号

令和二年度

目次

・会長挨拶	2
・学部長より	3
・退官教員より	4~5
・青山会よりお知らせ	6
・新任教員より	7
・在学生の取り組み	8~9
・OB より	10~13
・特別寄稿	14~16
・研究室の“いま”	17
・進路状況, 編集後記	18

山口大学共同獣医学部同窓会会員の皆様へ



青山会会長

深町 輝康 (V16)

共同獣医学部（青山会）会員の皆様，農学部獣医系同窓生の皆様，各界でご活躍のことと拝察申し上げます。

農学部獣医学科が獣医学部に発展的に昇格し，はや 9 年目になります。獣医学部同窓会（青山会）は，獣医学部第 1 回生が卒業しました 2018 年（平成 30 年）3 月，従来の農学部同窓会に所属していた獣医系同窓生を引き継ぐ形でスタートしました。農学部同窓会に所属している獣医系の同窓生の皆様には獣医学部同窓会への移行をお願い申し上げます。

さて今年（令和 2 年）は世界中が，コロナ禍に揺さぶられ続けている状況です。新型コロナの感染でご苦労されている方々，新型コロナ感染予防のために従来の活動が制限され，そして経済的にも大変厳しい状況下の方々には心よりお見舞い申し上げます。今年には伝統ある日本獣医学会 162 回大会が，山口大学獣医学部岩田祐之教授主催で開催されましたが，新型コロナの影響で Web 方式による開催とのことです。関係者各位のご苦労をお察し申し上げます。

過去にはペスト，天然痘，スペイン風邪などの大流行で，多数の犠牲者が記録されています。今回の新型ウイルス蔓延について，日本は欧米に比べ感染者や死亡者が圧倒的に少ないことが報道されています。その原因については遺伝子検査等で近い将来判明すると思います。ただ私は，日本人はデモや暴動を起こさず，自粛要請を粛々と守り，手洗い，うがい，マスク着用，家では靴を脱ぎ，お風呂好きなど，日常生活の中で我慢強く耐え忍んでいます。民度の高い日本人の国民性が欧米に比して感染者，死亡者の数が少ない主要な要因に思えてなりません。今秋には感染拡大の第 2 波の到来が予測され，予断を許されない状況でもあります。

獣医領域におけるコロナ感染症としては鶏や豚また猫の F I P などが知られています。人に感染するコロナウイルスは 6 種類あると言われうちそのうち，4 つは風邪の原因ウイルス，1 つは，（2002 年中国で流行した）コ

ウモリ由来の S A R S，1 つは（2012 年サウジアラビアで流行した）ヒトコブラクダ由来の M E R S で，この 2 つは重篤な呼吸器症状を引き起こします。7 番目が今回の新型コロナウイルスです（藤田紘一郎，感染症学，医科歯科大名誉教授）。致死率は M E R S が約 34%，S A R S は約 10%，新型コロナウイルスが約 2%（日本では約 1.9%，2020.8.27 厚労省 H P）で，日本のマスコミ（特にテレビ）は少し騒ぎすぎではないかと思えます。ペットから人に感染した事例は今のところ報告されていませんが，人から犬猫への感染事例が世界で数例，また動物園のトラやライオン（飼育員からの感染と推察される）の事例が報告されています（厚労省 H P）。新型コロナ感染症が人獣共通感染症に指定されるかどうかわかりませんが，S A R S，M E R S が動物由来であることから，世間の獣医師に対する期待がますます大きくなるものと思えます。このコロナ騒動の，1 日も早い終息を願っております。

青山会の由来は創刊号で述べました。積月性先生は，私たちに「大きな志を抱き，困難を乗り越えよ」と激励を送っています。大学卒業後，大志を持ち続けることはなかなか難しいことではないでしょうか。そんな時，同窓会（青山会）が，お互いの連携，団結の一助となり，皆様方の（大志）の継続や勇気づけの場になってくれるものと信じています。

慶應義塾大学同窓会（三田会）誌に義塾創建の言葉があります。福沢諭吉先生は；「独立自尊」，「実学」，「気品の源泉」，「半学半教」，自我作古」，「社中協力」と述べられています。その趣旨は；自他の尊厳を守り，実証的科学的に修練し，人格を備え，先に学んだものが後進を鍛え，前人未到の新しい分野に挑戦せよ，同窓生（学生，教職員，卒業生関係者全員）は一致団結せよ，との解釈がありました。

“発見し，育み，かたちにする”という山口大学の理念の下，獣医学という専門性を習得し，人のため世の為，全力で活躍，貢献できる人材育成に心血を注がれている山口大学の教職員の皆様には尊敬と感謝の念で一杯であります。私たちは卒業後も山口大学で学んだことを誇りに，「大志を抱き，いばら（棘）の道を進む，後輩も続け」の心意気を持ち続けたいものです。

同窓生が交流し切磋琢磨する，そんな場を同窓会（会誌）が担ってくれることを念じてやみません。この同窓会誌の充実を図るべく編集委員（地方，女性，学生など）を増やし，編集委員会を開催，多くの同窓生の皆様から喜ばれる同窓会誌を皆さんと一緒に，作り上げていかなければなりません。皆様の積極的な参加をお待ち申し上げます。

コロナ禍における獣医学教育と研究の在り方

共同獣医学部長

佐藤 晃一

昨年の会報では、2019年6月の欧州獣医学教育機関協（EAEVE）による訪問審査のご報告をしました。その後、12月のEAEVEの会議で、正式に共同獣医学部がアジアで初となるEAEVE認証教育機関として認められました。これはひとえに、卒業生、学外機関のご協力の賜と思ひ、今後も国際水準の獣医学教育を実践していく所存です。

このような嬉しいニュースの一方で、今年は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、多くの行事が中止となっています。大きいところでは、2019年度卒業式と2020年度入学式が中止となり、獣医学関係では、本学で開催予定だった第163回日本獣医学会学術集会がWeb開催となってしまいました。

新入生にとっては、入学後の公式・非公式の各種催しが中止となり、新1年生は同級生や教員の顔を知らないまま新年度が開始されました。さらに、6月上旬までの講義は全て録画配信となり、学生は大学への登校も制限され、下宿での録画講義受講とレポート対応、自粛下での日々の生活に追われる毎日になってしまいました。

このような中、共同獣医学部では学生のケアを最優先事項と考え、学生・教員間の交流、学生間の交流、学生が外に出る機会の確保に努めてきました。4年生以上の学部生については、大学本部に卒業研究の継続を承認頂き、感染防止対策をとった上で、実験ができる環境を構築しました。これにより、4年以上の学生が研究室で学生・教員とコミュニケーションを取る機会を確保しました。1～3年生については、Web上ではありますがホームルームを開催することにより皆が集まる機会を設け、健康や精神の状態を確認し対応してきました。特に、1年生にとっては、同級生の顔と声を知る良い機会となったようです。さらに、1年生には学部で飼育し

ている動物（ポニー、山羊、牛）の飼育当番を課し、指導系の2年生と共に生き物に触れる機会を設けることで、日々のストレスが発散できる場を設けました。幸い、1年生の学年担任（谷口先生・繁殖学講座）が時間を惜しむことなく、この作業に付き合い、技術を教えると共に学生のケアもされたことが非常に良い結果を生んだと思っています（添付の写真は、その際に作成した獣医学部版のSocial Distancing啓蒙写真です）。

6月下旬からは、感染防止に配慮した対面講義・実習を開始しています。共同獣医学部は学生数が少なく臨機応変に対応しながら感染防止対策を取りやすいため、教育も研究も止めることなく、COVID-19蔓延以前のレベルを確保しています。とは言え、全国的なCOVID-19感染の拡大に伴い、後期授業から（10月開始）どのような体制での実施になるか予断を許さない状況です。しかし、今後どのような状況になろうとも、学生の安全確保を第一に考えつつ、これまでどおりの教育・研究を実施していきたいと考えています。

卒業生の皆様におかれましても、移動制限がかかるだけでなく、中にはCOVID-19対応に追われている職域の方々もおられると思います。何とか、このコロナ禍を乗り切り、時期が来たら是非とも山口大学へお越し頂ければと思います。

最後になりますが、卒業生の多くの方々に『コロナウイルス対策緊急学生生活支援給付型奨学金』へのご支援を賜り、この場をお借りして御礼申し上げます。しかし、COVID-19の影響は継続しており、今後も生活に困窮する学生が出てくると思われることから、引き続き皆様のご支援をいただければ幸甚です。

<http://www.yamaguchi-u.ac.jp/kikin.html>

今後ともよろしく願ひいたします。



Social distancing 啓蒙画像

退官教員より

感謝よりその先へ



国立感染症研究所

山口大学共同獣医学部名誉教授

前田 健

1996年8月末日に灼熱の湯田温泉駅に降り立った。湯田通りのラーメン屋で昼食を食べたとき、ママさんに「山口はいい人がいっぱいいるよ」と聞き、改めてそうだと感じている。それから23年間（アメリカに2年間の留学）にわたり、山口大学で多くのことを学ばせていただいた。授業では獣医微生物学・伝染病学など、今の倍近くのコマ数を行い、微生物学実習等をこなした。「家畜伝染病予防法にのっている感染症をすべてまとめよ」という試験問題を出して、4時間近くかけて解答していた学生もいた。それを採点するために4日間かけたのも若き日の思い出である（反省しています）。しかし、就任後の2年で、獣医微生物学・伝染病学の教科書をほぼすべて暗記できるようになった。お酒も好きで、バブル崩壊後の湯田温泉の街を活気づけると言って飲み歩いていたのも懐かしい。

研究では、学生時代にウイルスの分子生物学しかしていなかった私が、予算もあまりない中、何をしようかと考え、イヌではジステンパー、ネコではネコ伝染性腹膜炎ウイルス、ウマでは馬鼻肺炎と各動物で重要と考えられる感染症の疫学調査とウイルス分離を開始した。何もわからなかった当時、農学部南棟の同じ4階にあった衛生学教室の井上先生、岩田先生、病理学教室の林先生（故人）に大変お世話になった。

夜の部では、同じく4階にあった解剖学教室の牧田先生（故人）、木曾先生（私の方が半年赴任が早い）に大いにお世話になった。そして、なんとといっても、4階の学生たちと楽しい飲みを経験した。今考えると若気の至りの面も多々あった。私の恩師、見上先生（故人）の、「酒を飲みたければ、きちんと仕事しろ」という言葉を胸に、たとえ二日酔いになっても仕事だけは一応きちんとしたと信じている。「信じている」という言葉で、違うと思っている方はお許しください。

24年間にわたり、多くの学生と出会ってきた。最近、卒業生たちと仕事をする機会も増えてきた。臨床の現場等で感染症で悩んだときに相談してくれるのがうれしい。また、卒業生たちと共同研究も一緒にできるようになってきた。山口大学で行ってきたことが、花開きつつあると考えている。

研究の話に戻るが、多くの山口大学の先生方と共同研究させていただいた。この場を借りて感謝したい。更に、学外の方とも、多く共同研究させていただいた。私は、研究者としてはあまり優れていないが、「人を大切にする」ということだけは守ってきたつもりである。「期待されたこと」は可能な限り努力し、「何らかの成果」を返すことを目標にしてきた。小さな信頼関係の積み重ねが、大きな仕事につながっていくのだと信じている。また、相談された内容に関しては、基本的には断らないスタンスで研究を進めた。そのせいで、ブラック研究室と呼ばれることもあった。しかし、所属学生の多くが、私の期待以上の仕事をしてくれた。山口大学獣医微生物学教室が、学会のたびに「いい仕事しているね」「本質的な仕事をしているね」と言っていたことも増えていた。

このような幸せな山口大学での教員生活を捨てて、国立感染症研究所に異動したのは？と聞かれることが多い。不満など何もなかった。ただ、伴侶動物・野生動物の感染症の研究をしているうちに、これらの動物の感染症の発生を把握する行政機関が何もないことに疑問を持った。生産動物は家伝法、ヒトは感染症法で感染症の診断・把握がされている。伴侶動物においては狂犬病予防法しかなく、野生動物に至っては鳥インフルエンザ以外はほとんど各大学などで独自の調査研究を行っているのみである。国立感染症研究所に移っても何もできないかもしれないが、何かしたいと思って勧誘を

受けた際、決断した次第である。おそらく、あと 10 年近くしか残っていないが、何か獣医学のために貢献したいと思って研究の日々を送っている。

異動後は、慣れない大人の社会であった。新人のような感覚で、ストレスがたまることも多いが、国立感染症研究所は感染症の調査・研究に特化した研究機関であり、感染症の対策に対しては一致団結してできる素晴らしいところがある。SFTS の調査研究をはじめとして、異動後には国内初の B ウイルス感染症の発生、14 年ぶりの狂犬病の発生、COVID-19 のパンデミックなどの診断・対策に携わることができた。刺激の多い日々を送っている。COVID-19 ではウイルス分離・血清診断など私の最も得意とする分野で毎日忙しく手を動かしている。非常に楽しい。あとは、私の目標である伴侶動物・野生動物の感染症を統合的に解析し、その成果を皆に還元する組織にむけて努力していきたい。

EAEVE の承認直前に異動して、佐藤学部長をはじめとして多くの方々に迷惑をかけた。また、大学院の学生の半分は山口大学、半分は東京という形で、それぞれに迷惑をかけたことも申し訳なく思っている。皆が幸せといえるように更なる努力をしなければいけないと考えている。

山口大学の教員・学生・OB の方々には、是非、感染症に関する相談等、お役に立てることがありましたらお気軽に声をかけてください。先にも述べましたが、教え子から相談が来ると嬉しくて他よりも頑張ってしまう。メールアドレスは kmaeda@nih.go.jp です。

私は、山口大学での 24 年間で学んだことを最大限生かして、今後も獣医学に貢献したいと考えています。COVID-19 でお酒の飲む機会が激減して、ストレスも溜まっていますが、研究にそれをぶつけて頑張っていきます。皆様も、お体に気を付けて頑張ってください。

最後に、私の勝手気ままな研究生生活を行えるのは、すべて私の家族の“あきらめ”にも近い理解のおかげです。山口大学でお世話になった方々に加えて、家族にも感謝したい。

最後の最後に、異動直前の獣医微生物学教室の仲間たちの写真を載せておきます。彼らには迷惑をかけてしまいました。素晴らしい仲間でした。ありがとうございます。そして、これからもよろしく願います。



青山会からのお知らせ

1. 山口大学ホームカミングデー2020 について



山口大学では、卒業生との繋がりや地域の方々との絆を深めること、卒業生や地域の方を大学に歓待することを目的に平成 25 年度からホームカミングデーを開催しています。

第 8 回ホームカミングデーは、令和 2 年 10 月 31 日（土）にオンラインで開催します。キャンパスへお越しいただけなくとも、みなさんとの絆を深めることができるよう、様々な企画を用意していますので、ぜひお楽しみください。

【開催日時】 令和 2 年 10 月 31 日（土） 10 時 30 分～

【参加方法】 開催日時以後に、<http://www.yamaguchi-u.ac.jp/alumni/hcd/2020.html> から各企画にアクセスし、ご視聴ください。また、配信動画はイベント開催日以後も本サイトからご覧いただけます。なお、一部のライブ企画は事前申し込み制としております。また、本学卒業生・学生・教職員のみ参加可能とさせていただいている場合がございますのでご了承ください。共同獣医学部においては、①EAEVE 認証の概要等、②青山会会長からのメッセージ、③学部長からのメッセージ、④動物医療センターの紹介、⑤クリニカルスキルスラボの紹介 といった内容での配信を予定しております。



令和元年度 山口大学ホームカミングデー

2. 令和二年度白衣授与式について

青山会では、運営の一環として在学生の積極的な支援を行いたいと考えております。その一つとして昨年度同様、5 年生の白衣授与式への支援を行いました。

現在、5・6 年次の臨床実習の参加のためには、医学部、歯学部、薬学部と同様に、共用試験（Computer Based Testing: CBT および Objective Structured Clinical Examination: OSCE）に合格する必要があります。山口大学では、無事試験を通過した学生に、臨床に携わる自覚を促すという意味で白衣授与式を行っており、青山会はこの白衣の費用を負担しております。

青山会では上記以外でも海外での勉強会への援助など、様々な学生支援を模索中です。青山会へのご入会ならびに会員の皆様よりのご理解、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



令和二年度 共同獣医学部白衣授与式



新任教員より



獣医解剖学研究室 助教

いまい ひろゆき
今井 哲之 (V61)

本年度より獣医解剖学教室の今井啓之でございます。出身は山口県で学部・大学院と山口大で学び、学位取得後、九州の大学を経て舞い戻る形で本年助教（テニュアトラック）として着任しました。昨年度着任された伊賀瀬先生とは同級生で、学部学生の頃より今後の獣医学のあり方について喧々諤々と議論した仲です。こうして同じ職場で皆様と今後の獣医学教育・研究を作り上げることができ、大変嬉しく思います。

助教として獣医学教育を担うとともに、テニュアトラック助教として世界で活躍する研究者になるべく日々研鑽に励んでいきます。世界で活躍する研究者になるべく、これまでおしすすめてきた基礎研究と並行して、山口大学の特色を活かして山口らしい研究にも挑戦していきたいと考えています。

ここで、私が大学教員になろうと思ったきっかけについて考えてみました。獣医解剖学と獣医発生学に魅了されたのが大きかったと思います。どうして歯の数が違うのか、胃が複数あるというのはどんな気持ちなのか、ウシとブタの違いは何なのか、胎生の鳥はいないのか、胚発生はなぜこんなに美しいのか、哺乳類とは何なのか。このようなことを考えていたように思います。このような気持ちにさせてくれる講義・実習等に出会えてこの恍惚とも言える高揚感をヒトに伝えたい、この講義・実習等の内容を自分自身の手で掘り下げたいと考えたのだと思います。

結局のところ、獣医学よりも広い視点で哺乳類とは一体全体何ものなのかということ私をどの程度解き明かせるのかたかがしれているようにもおもいますが、その一方で哺乳類ばかりを見つめていては見通しが立たないんでなからうかと思ひ広く脊椎動物一般、後口動物、真核生物一般で俯瞰した方がいいのでしょうか。



在学生の取り組み

学生プロジェクト

『山大にゃんこ大作戦』の紹介と他団体との交流

私たち「山大にゃんこ大作戦」は、望まれない死を迎える猫の命を少しでも減らしたいという想いのもと2018年度に共同獣医学部の学生が中心になって結成された団体です。現在私たちは、山口大学内を対象とし TNR (Trap-Neuter-Release, 捕獲-不妊手術-戻す)を通して飼い主のいない猫の数を減らす活動をしています。上記の目標に少しでも近づけるように、また大学内の猫によるトラブルを減らすことも目的に活動しています。活動当初はまさに手探り状態で、右も左もわからないという状況でしたが、TNR 活動についてアドバイスをくださった他大学や専門家の方々、クラウドファンディング (<https://readyfor.jp/projects/yamadainoneko>) や募金という形で活動を支援してくださっている方々のおかげで、TNR 活動の実施に至ることが出来ました。これからも、支援してくださっている方々のご期待に沿えるよう活動に取り組んでいきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。もし、ご興味をもたれた方がいらっしやいましたら「山大にゃんこ大作戦」のHP (下記アドレス/QRコード) をご一読いただけますと幸いです。



<http://yamaneko776.webnode.jp>

今回その一環として、山大にゃんこ大作戦の今後の活動の参考にするために、社団法人 HACI(Human and Animal Community Inclusion) プロジェクト*の理事 本田、佐方両氏と、山大にゃんこ大作戦の橋本(3年生)、崎川(5年生)らが2020年9月10日にZoomを介して対談を行いました。

*HACI プロジェクト…福岡市内で、地域猫や野良猫の保護と譲渡の促進を行う団体や個人と連携するプロジェクトであり、プロジェクトの一貫として2020年秋、主に猫の不妊去勢手術を行う専門病院を新たに開院する。



にゃんこ大作戦代表学生と HACI プロジェクト代表との対談風景

にゃんこ大：HACI プロジェクトはどのような取組みをされていますか。

HACI：猫の不妊去勢手術を積極的に行うことで、野良から人が半ば関与する地域猫になったり、殺処分される猫の数を減らしたりするのが目的です。単なる保護では不十分で、地道ではありますが、猫の不妊去勢手術と予防治療に特化した専門病院の設立が必要と考えました。

にゃんこ大：僕たちのプロジェクトでは、手術を行う協力獣医として、現在近隣の1つの協力病院において獣医師2名が手伝ってくれていますが、HACI プロジェクトの病院ではどのように運営されるのでしょうか。

HACI：HACI が運営する手術専門病院は、元々30年以上動物病院を開業し、愛護団体とも長く付き合いのある獣医師が引退した後、不妊去勢手術に特化した病院を再開したのが始まりです。今はそのベテラン獣医師の技術を後進が受け継ぎ、本年秋からの開業に向けて準備をしています。



山口大学構内の猫たち



にゃんこ大：僕たちのところでは、手術の費用等経費についても潤沢ではないため、クラウドファンディングを先日実施して集めました。ほかになにかいいアイデアはありますかでしょうか。

HACI：福岡の愛護団体等は、一部市や区の助成金、あるいは頭数の制限はありますが獣医師会の助成を利用しています。ほかに多くの団体さんは独自で支援者を持ち、例えばブログ更新などで収益化をはかったり、支持者との共感を深める取組みから寄付を集めたりしています。

にゃんこ大：HACI プロジェクトは今後どのように発展していくのでしょうか。

HACI：さまざまな団体や獣医学生との交流を増やすことで獣医業界への貢献に努めたいと思っています。

また、不妊去勢手術専門病院という性質上、経過治療や緊急対応はないため、時間に制限のある獣医師、特に女性獣医が働きやすい環境を提供する就労促進などにも取り組みたいと考えています。

HACI プロジェクトおよび不妊去勢手術専門病院の問い合わせについては 佐方氏まで

(E-mail: pianoman@leadsail.co.jp 電話: 092-3505-7680)

OB より

公衆衛生獣医師の仕事

山口健康福祉センター（保健所）

西藤 裕一郎（V34）

山口県の公衆衛生獣医師は、主に、食品衛生、人畜共通感染症の予防、環境衛生の業務に従事しており、公衆衛生等行政を担う本庁（生活衛生課、環境政策課、廃棄物・リサイクル対策課）、県民窓口である健康福祉センター（保健所）及び動物愛護センター、地方衛生研究所の環境保健センターに配属されています。

私の所属する保健所では、地域保健法に基づいて県民の健康の保持及び増進を図るための事業を行うとともに、県民からの相談等に応じています。また、法令に基づく食品営業、旅館業などの営業許可、営業施設の監視・指導を行っています。

保健所の業務において、獣医技術が役立つことはまれですが、感染症の調査と分析、動物に関する相談・トラブル対応において、培った知識が役に立っています。

業務の中で、食品の事故や感染症は、突然発生し、かつ、速やかな対応が必要であるため、平素の準備が欠かせません。

そのため、常に、雑誌や文献、ネット等から最新の知識を入手し使いこなすとともに、積み重ねた経験値、さらに経験に基づく対応想定が必要となります。

過去の反省事例として、平成 13 年の牛海綿状脳症（BSE）が思い出されます。

私は、食肉衛生検査において、と畜業者や設置者等と検査実施の調整等を行うとともに、消費者等からの相談にも対応していました。

発生当初、ふらつく感染牛の映像とともに、新型ヤコブ病を引き起こすおそれと報道されたことから国内はパニック状態となり、牛の処理頭数も激減しました。

食肉衛生検査では、病原体が含まれる特定危険部位の除去、病原体保有の有無の全頭検査が行われました。安全対策の本質は特定危険部位の除去でしたが、不安解消のための全頭検査がクローズアップされました。

その後、科学的根拠に基づいて安全対策の見直しが進められたことから、若齢牛が検査対象から除外され全頭検査は廃止となりました。この見直し時に、科学的根拠の理解を得るため県民向け説明会の開催など、多くの手間と長い年月を要しました。

発生当初に、科学的根拠に基づく対策を行ってれば、また、当面の対策であった全頭検査について科学的根拠に基づいての見直しを早期に着手してれば、検査見直し時にも、より理解が得やすかったのではと感じています。

保健所への相談内容は、その時々的事件や疾病の流行等や県民の感情を反映しています。また、どんな人が来ても冷静かつ丁寧に対応し、正確に回答しなくてはなりません。

新型コロナウイルス感染症の相談においても、BSE発生時と同様に、「理解できないものは危険とみなして、避ける」、「専門家の意見やメディアの情報を頼りに判断する」との反応がうかがえます。また、一部には、誤った知識に基づき「自分なりの判断」を行う者がおり、この誤解が風評被害を引き起こすおそれもあります。

回答時に、科学的根拠に基づく説明を補足し、誤解を解くとともに、相談者自身が冷静に判断できるよう助言を行っています。

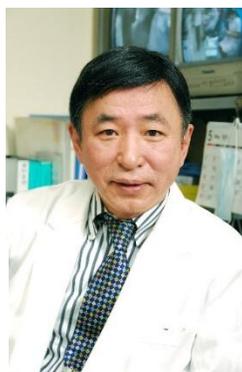
獣医師が、目の前で向き合う相手は動物ですが、説明の相手は、動物の向こうにいる飼主の人間です。専門的な知識をわかりやすい言葉により、科学的根拠をもって説明することにより、飼主に行動を起こしてもらうことが目的です。

そのためのコミュニケーション能力は、公衆衛生分野に限らず全ての獣医師に共通する資質であると考えています。



山口健康福祉センター入口

遅れてきた青年



日本口臭学会理事・指導医
医療法人ほんだ歯科理事長・院長
本田 俊一 (V28)

28 期生の本田です。1970 年代後半の大学時代は、多くの人たちは経済動物や犬・猫などの小動物に興味を持って勉強する人が一般的でしたが、私は霊長類について独自に勉強していました。

当時ワシントン条約が締結され、卒業後はワクチン製造や実験モデルに不可欠なカニクイザルの人工飼育や人工授精のビジネス化を模索し、その時の解剖学教室助教授であった牧田登之先生に指導を仰ぎ、設立されたばかりの筑波医学実験用霊長類センター(現在の独立行政法人医薬基盤研究所霊長類医学科学研究センター)へ研修に行きました。しかしながら、霊長類の人工授精の研究は始まったばかりで、当時の状況では個人レベルでの事業化は非常に難しく断念しました。そのご縁で当時の厚生省の検疫所に就職しました。

検疫所時代は検疫・防疫行政官として、検疫・海外輸入監視・港湾衛生・地域保健衛生などの業務に従事し、専門職として海外輸入感染症の基礎研究、検疫区域内の感染動物の調査・研究、衛生害虫のフィールド調査や基礎研究など非常に広い領域の仕事に携わりました。

検疫専門職は、医師が非常に少なく、獣医師がその任務の多くを担っており、山大の先輩も数名所属されていました。

事務的な行政職以外の大半の時間は、調査研究をしたりして、比較的自由度が高かったです。当時はコレラ菌のパンデミックの発生事例を経験したり、エボラ出血熱・HIV や出血性大腸菌 O157 など、未知な輸入感染症が立て続けに問題となり、基礎研究と並行して有効な迅速診断法などの研究に没頭しました。

検疫の現場は材料が豊富なことから次々と新しい知見にも遭遇し、大阪大学微生物病研究所との連携で多くの研究成果を上げることができました。今では当たり前となっている遺伝子解析技術の導入や酵素抗体法など検査技術の大転換時期に加え、新しいコンピューター技術の導入もあり、細菌学の世界も大躍進した時代でした。

学生時代、獣医学において基礎医学の知識を習得していたことは非常に大きな力になりました。その後、10 年の間に門司検疫所・大阪検

疫所和歌山下津支所・大阪国際空港検疫所をへて退職し、併任していた大阪大学微生物病研究所に拠点を移し、なお検疫所とも連携しながら基礎研究にも従事しました。国際協力事業団の仕事で、ケニアでの感染症研究所設立のための基礎リサーチなど、研究の幅を広げました。この時に役にたったのが、霊長類研究の成果や動物学などの知識と細菌学的な知識でした。

その後、大阪大学の学士編入制度の試験を経て歯科の領域に進むことになりました。歯科という歯牙を中心とする技工的アプローチに疑問を抱き、医科の先生とともに、口腔を消化器として扱う医学体系を新たに構築し、バイオガス(呼吸ガス・生体ガス)や唾液に関する臨床研究、さらに「口臭」という新しい切り口での臨床分野の開拓は今までになかった口腔心療内科的アプローチとして、学会の創設にまで携わりました。

歯周病抗体を配合したペットフード開発・ペットの口臭抑制フードの開発にも関与し、獣医学との接点でも仕事の幅が増えました。人に対するアプローチは同時に獣医領域にも応用で、同時にニーズがあるためです。歯科と医科さらには獣医学まで巻き込んだ新しい医療分野の創設にかかわることができました。

歯科のみならず、医科や獣医学領域など幅広い領域にかかわれるようになったのは、山口大学農学部獣医学科での知識、そこで学び合った仲間との経験が原点になっています。獣医学は、ほかの医学に比べて、フレキシブルな応用性・多様性のある広い領域であり続けると思います。

今年古希を迎えましたが、まだまだ新しい領域にチャレンジする「遅れてきた青年」であり続けたいものです。

経歴:

日本口臭学会常任理事・指導医、医療法人ほんだ歯科理事長・院長。1980 年山口大学農学部獣医学科を卒業後、厚生省(現・厚生労働省)に入省。検疫業務に携わる。業務の傍ら大阪大学微生物病研究所において腸管感染症の基礎研究も行なう。退官後、大阪大学歯学部で学士編入し、卒業後、歯科医院勤務を経て、1995 年に、ほんだ歯科を開業し、1997 年には医療法人ほんだ歯科を設立。歯科医師として臨床に携わることで口臭に悩む患者の多さを目の当たりにし、「口臭・口臭症」の研究に取り組む。2000 年には口臭のデオドラント技術および口臭症治療に関するプロトコル「ほんだ式口臭治療」を確立。その後も治療に従事する一方で専門医やスタッフの育成に努める。口臭に関する第一人者であり、研究発表や講演はもとより、テレビ、雑誌などメディアでも活躍している。

小動物臨床における山口大学卒業生のつながりをもっと深めよう

シラナガ動物病院（山口県周南市） 院長 白永 伸行（V40）

山口大学獣医学科共同獣医学部卒業の諸先輩方並びに同門諸氏へご挨拶申し上げます。

私は山口県周南市（旧徳山市）で動物病院を開業しております。平成6年卒業（獣医内科学研究室）の白永伸行と申します。卒業以来小動物医療に従事してかれこれ27年目になります。また青山会の幹事並びに山口県支部長を仰せつかっております。山口県獣医師会の理事職のほか今春まで10年ほど小動物部会の部会長を仰せつかって山口県の小動物臨床従事者の向上に取り組んで参りました。

この寄稿では、卒業生の交流を図る情報紹介として小動物の職場便りなどを記載すべきところでございますが、さすがにそういうことはありきたりなので割愛させていただき、小動物臨床における山口大学OBの母校とのつながりの状況をこれまで見てきた私見を述べさせていただきます。

山口大学の卒業生は1学年における人数が私学に比較して少ないことから、日本の小動物臨床従事者においてそれほど多くを占めるわけではありません。現在の小動物臨床を見渡してみると、様々な分野で第一人者と目されたり、地域の獣医師会などで獣医業界への活動を熱心にされていたりと高名著名な先生が山口大学卒業生にもいらっしゃいます。また、知名度が急上昇している注目株が山口大学卒の後輩であったことなどを知ることがありました。みなさんも「あの先生山大なんだ」と気づくとなか誇らしげに感じたりするものではないでしょうか？

しかしこれまでそういう業績や実績に関する情報は卒業生と在校生の間でもしかり、決して活発な交換ができていなかったと思います。

小動物臨床では自分の行っている仕事が正しいか常にセルフチェックを行うために、特に卒後教育が必要です。山口大学は西日本の小動物臨床の教育機関として存在感を放ち、特に動物医療センター（YUAMEC）が西日本広域に小動物における高度医療の提供の場として高い評価を示しています。また一方で、臨床現場ではいま空前の獣医師不足であり、母校に供給を求めのお考えをおもちの卒業生もいらっしゃると思います。それらのような観点から、母校とコンタクトを持ちたい要望も多いことでしょう。

よく学会や勉強会などで様々な卒業生から以上のようなお話を伺っておりました。山口県在住に聞いてみるわけです。私は山口県開業の立場から山大や山口県のことなどをお話しして感じたことは、みなさんやはり学生時代を過ごした山口に関心があるのだと強く感じました。

もう5、6年前のことですが、臨床の卒業生を結ぶ何か欲しいとして、臨床に関与する卒業生たちが集う場所に、臨床の同門会を設立するという素案が有志たちで上がりました。私も色々調整に入り核となる山大の卒業生諸先輩方やキーパーソンとなりそうな後輩たちに説明をしたりしたものでした。

すると同じ時期に農学部獣医学科から共同獣医学部に移行するにあたり、同窓会も独立して一から立ち上げるということになりました。それが青山会の設立の経緯となります。その話し合いをしていたメンバーからすると、この「青山会」が設立されたことは発展的解消になりますが、山大を中心とした臨床教育の向上がみこめるチャンスが生まれやすくなったものと考えております。

当時の素案の中で具体的なことを申しますと、それぞれYUAMECの臨床セミナーが定期的開催されていますので、年に一度は年次大会にして卒業生とのシンポジウムやレクチャー、そして今の医療センターおよび研究室がどうしているのかを知ってもらう場にすればいいのでは？と思います。むろん青山会のホームカミングデイに合わせてもいいと思います。全国の山大卒業生で小動物臨床に現在従事している方や以前していて職場復帰を目指す方、そしてこれから小動物臨床希望の在校生を含めて年に一度、山大に「勉強で（ここ重要）」戻ってこられる場所を作ればなんと私は希望を抱いています。みなさんいかがでしょうか？

開発業務受託機関

平川（旧姓：佐川）由佳（V53）



私は 2007 年 3 月に農学部獣医学科を卒業し、半年ほど小動物臨床に携ったのち、開発業務受託機関と呼ばれる企業に転職しました。それから現在に至るまで、同じ会社に在籍しています。今回貴重な投稿の機会を頂戴しましたので、私の業務の内容を簡単にご紹介し、またコロナ禍において感じた諸々の思いを書かせていただきます。

開発業務受託機関は、製薬会社から臨床試験に関する業務を受託し、当局へ新しい医薬品の承認申請を行うお手伝いをする会社です。承認申請のために行う臨床試験を治験と呼びますが、受託する試験の中には、治験以外にも医師が行う臨床研究や、製造販売後臨床試験などもあります。私が所属している品質管理部では、病院で試験が行われている期間を通し、その被験者さんの安全性や倫理が守られているかどうか、また、集められてくるデータの信頼性が保たれているかどうか、臨床試験に関する省令（GCP 省令）と照らし合わせて、試験のプロセスを管理しています。また、承認申請に必要な文書の保管管理も行っています。

2007 年から、2 回の産休育休を挟みながらも、現在まで概ね安定して仕事に従事してまいりましたが、今年 2 月頃からコロナウイルスが爆発的に流行し始め、3 月には全国の小中学校が一斉休校となり、「業務の継続」に対し大きな壁が立ちふさがりました。私の会社はそれまでも在宅勤務を導入し始めていたことから、すぐに連日の在宅勤務に切り替えることができました。家には常に 2 児がおり、仕事を放り投げてしまいたいことが何度もありました。しかしながらそのような中で、社長から全社員に、「我々の仕事は、医療に貢献すること。そして被験者さん・患者さんの健康・安全・命を守ること。我々の仕事は止められない。」という内容のメッセージが届きました。また、所属長から時短社員宛に、「効率が下がるのは当然。子供の世話により業務を中断してもよい。とにかく業務を継続すること。」という内容のメッセージをいただきました。私はこれらのメッセージをとっても難しく心強く感じたと同時に、自分自身が業務を継続することが、新しい薬を待っている患者さんや、治験に参加して下さっている被験者さんにとって非常に

重要であることを改めて感じたのです。子供と一緒に在宅勤務をすることは、確かに大変なことでした。仕事はできるだけ子供が寝ている時間、子供が食事をしている時間を狙って行い、休憩時には子供の手を引いて、その日の散歩に連れ出しました。自分がいつ食べていたのかも余り記憶になく、相当体の負担もあったと思います。しかし、何とか継続して現在に至るのは、「何とか業務を継続しよう。」と心底思えたからでした。

仕事を続けるためには、その仕事にやりがいがあり、楽しくなくてはなりません。「楽しく」というのは、もちろん苦勞がないという意味ではありません。自分が誰かの役に立っていることを思うこと、職場の人と活発に意見を交わすこと、いただいた給料で何かを買うことも、「楽しく」仕事をする事になると思います。そしてやりがいは、まさに私がコロナ禍で再認識した「自分の仕事の成果を誰かが待っていること」すなわち使命感であると感じます。また、今回のコロナ騒ぎの中で、もう一つ心から感じた思いがあります。それは、仕事をできていることへの感謝です。コロナの影響を受け、仕事が減少するなどし、苦しい思いをしている人は数え切れません。そのような中で、業務を継続するよう指示されること自体、奇跡であり、とても有難いことと思っています。

禍いは起こらない方が良くは決まっていますが、その中で人は多くのことを学びます。それにより、人は強くなり、前へ進めるようになります。私自身も、これを読んで下さっている皆さんも、ひときわ強くなり、前へ進んでいると私は信じています。そして少しでも早く、コロナへの予防法や治療法が確立し、皆さんに安らぎが訪れることを心から願っております。

獣医師こそ 21 世紀に求められる人材

衆議院議員 山際 大志郎 (V41)



2020年に猛威を振るった新型コロナウイルス感染症は、私たちの生活に多大な影響を及ぼし、様々な問題を浮き彫りにしました。しかし、私たち獣医学を修める人間は、このような事態が起きる可能性を感じながら長年生きてきたのではないのでしょうか。

獣医学を学ぶ時私たちは、一種類の生物のみを対象にするのではなく、他の多くの生物種と比較する中で、その種の特徴を学んでいきます。多くの生物種が互いに影響を及ぼし合い、微妙なバランスを取りながら地球上で生存することを強く意識しながら、私たちは獣医学を発展させてきました。コロナパンデミックがなぜ起きたのかという問いに対して、より根源的に、俯瞰的に捉えることができるのが、獣医学に身を置く我々であると強く感じました。

一方、世の中を見渡すと、まるで、地球上には人間という生物種のみが特別な種として存在していると言わんばかりの人間至上主義がはびこっています。人間は他の生物種を服従させ、バランスをとる必要が無いかの様な振る舞いをしているのではないのでしょうか。これが持続可能な生存戦略ではないことは、我々獣医学を学んだ人間には容易に理解できます。

これからの時代に求められるのは、一つの分野にだけ深い知見を持っている人材ではありません。様々な事象を俯瞰し、バランスの取り方を考案する。そしてそれを世の中に発信し、実現することのできる人材の重要性が増しています。獣医学を修めた人材は、正にそれに合致しています。従って、人類が生存し続けるために、今後私たちの役割・使命が益々大きくなることは間違いありません。

在学中の皆様には、獣医学を学んだ後、世の中の如何なる分野で活動するか、に関して、是非とも視野を広く持つ様お薦めします。

多くの方が獣医学と聞くと小動物の臨床獣医師のことを思い浮かべるでしょう。しかし、実際には検疫の水際検査官などの公務員から、様々な分野におけるバイオロジーの研究者、あるいは私の様に社会全体を対象にした政治家という職業もあります。その根本の考え方は、前述の様に、数多ある生物の中でのバランスをとることであり、数多ある世の中の事象のバランスを取るという視点です。そしてそれができる人材を世の中が必要としています。

自分自身にどのような興味があるか、社会に対するどのような関心があるかを、獣医学の勉強を通して探して頂きたい。一人一人多様性があるが良い。違う問題意識を持っていても良い。獣医師一人一人が持つ問題意識を解決する場が、社会の中には必ず用意されています。

21世紀には特に、獣医学を修めた人間が世の中で必要とされる。是非それぞれが問題意識を持って、自分の志にまっしぐらに進んで下さい。そうすれば必ずや道は開けると確信しています。

特別寄稿 2

動物とヒトのコロナウイルス感染症雑感

一般財団法人日本生物科学研究所 理事長

日生研株式会社 代表取締役社長

長井伸也 (V29)



1. 自己紹介

私は4年生の学部卒業後に獣医師の免許を取得できた、いわゆる4年制獣医の最後の学年にあたります。1981年に農学部獣医学科を卒業し、修士課程を経て1983年4月に財団法人日本生物科学研究所および日生研株式会社に入社しました。以来、現在まで37年間、動物用ワクチンの研究開発に携わってきました。学生時代、家畜微生物学教室に所属していたころから数えると40年以上動物の微生物感染症の制御に取り組んできたことになります。

2. 1980年代のヒトの感染症に対する認識

日生研に入社後、細菌の病原性に関する分子遺伝学的研究を行うため、1987年から2年間、東京大学医科学研究所（東大医科研）に留学していました。その当時、東大医科研では、ほとんどが癌と生活習慣病の研究に重きがおかれ、ウイルスや細菌等の微生物が原因のヒトの感染症については、先進国ではもう過去の病気で、既に克服されたものだという雰囲気でした。そのような中、1980年代後半に卵や関連製品によるサルモネラ・エンテリティディスが欧米諸国をはじめ我が国でも流行し、続いて1997年に大阪府堺市で学校給食に起因する腸管出血性大腸菌O157による集団下痢症が起り、この現代にヒトの細菌性下痢症の再来?!と驚いたものでした。以降、ノロウイルス（1998年～）やトリインフルエンザH5、H7（2004年～）、ブタインフルエンザH1N1（2009年～）と次々にヒトの健康を脅かすウイルス性

の感染症が発生し、ついに2020年に新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）

の世界的なパンデミックが発生しました。そうやって考えると、ヒトの分野では「感染症はもう既に克服された」という当時の認識は間違ったものであり、感染症を制御するために、未知のこと、研究すべきことが実はまだまだたくさん積み残されていたということが今回改めて分かったというわけです。

3. 新型コロナウイルスは動物由来？

ヒトでの感染があまりにドラスティックなので注目されていませんが、新型コロナウイルスはおそらく人獣共通感染症です。元々はコウモリに由来するのかも知れませんが、いきなり人間界に侵入したのではなく、なんらかの哺乳類の中間宿主を介したと考えられています。フェレットやネコに人工感染したという報告がありますが、イタリアで抗体検査を実施したところ、ペットとして飼われていたイヌの陽性率は3%、ネコの陽性率は4%であったとされています。新型コロナウイルスは、ヒト以外にも様々な動物に感染する能力があるのかも知れません。そもそもヒトに感染するウイルス156種類のうち114種（73%）が動物由来であると言われていることからすると、このウイルスが動物に感染するのはさほど不思議ではないと思われます。

4. 動物のコロナウイルス感染症とワクチン

さて、動物のコロナウイルスですが、イヌ、ネコ、ウシ、ウマ、ブタ、ニワトリ、他多数の動物に固有のコロナウイルスが感染していることが知られています。中でも、我々獣医師にとって重要なコロナウイルスの病気は、ニワトリ伝染性気管支炎（Infectious bronchitis : IB）、ブタ伝染性胃腸炎（Transmissible gastroenteritis : TGE）、ブタ流行性下痢（Porcine epidemic diarrhea : PED）およびネコ伝染性腹膜炎（Feline infectious peritonitis : FIP）等です。うち、日生研ではニワトリ用の IB とブタ用の TGE および PED のワクチンを開発・製造・販売しています。IB については、生ワクチンと不活化ワクチンの両方があり、主な免疫の機序は液性抗体の上昇で、各農場に感染しているウイルス株に対しニワトリがどの程度中和抗体価を保有しているかによって、その防御効果が決まります。一方で、IB ではウイルスの変異が容易におこるため、変異株の出現と新株に対するワクチン開発とがいたちごっこになっています。続いて、TGE と PED はコロナウイルスが原因の新生豚の下痢症です。生ワクチンで母豚を免疫し、常乳中に IgG（中和抗体）を分泌させ、腸管内でのコロナウイルスの増殖を抑制します。このようにニワトリの IB、ブタの TGE および PED とともにワクチンは主として原因となるコロナウイルスに対して IgG（中和抗体）を誘導することが主眼となっています。一方、ネコの FIP では、免疫することによって IgG（中和抗体）が上昇すると、抗体介在性免疫増強（ADE）という現象が起こり、逆に発症が促進され、死亡の時期が早まる傾向があることが分かっています。このことから、FIP に対してははまだ有効なワクチンは開発されていません。

5. 新型コロナウイルス感染症に対するワクチンの開発状況

さて、新型コロナウイルスに対するワクチンの開発状況ですが、2020年8月10日時点のWHOのまとめによりますと、28種類のワクチンが臨床段階、139種類のワクチンが前臨床段階にあり、多様なモダリティー（予防手段）のワクチンが一斉に世界の各研究機関で開発されています。これらを分類すると 1) ウイルスベクターワクチン 2) メッセンジャーRNA (mRNA) ワクチン 3) DNA ワクチン 4) 組換えタンパク質ワクチン 5) 組換えウイルス様粒子 (VLP) ワクチン 6) 全ウイルス不活化ワクチン になります。このうち、ウイルスベクターワクチン、mRNA ワクチン、および DNA ワクチンは、先進国でヒトに使用されるワクチンとしてはほとんど実績がなく、もしその中のどれかが実用化されれば、今回初めて広く利用されることになります。そして、それがヒトに対して安全かつ有効であることが確認され

れば、今後は動物用のワクチンにも応用されてゆくことになるでしょう。一方、何よりも大事なのが、新型コロナウイルスに対する感染防御のメカニズムです。IB や TGE および PED のように防御の際に液性免疫（中和抗体）が奏功するのか、あるいは FIP のように液性免疫では返って良くないのか。これまでの報告からすると、本病の病理発生機序はかなり複雑のようですので、やはり、液性免疫とともに細胞性免疫がバランスよく誘導されるのが理想ではないかと想像されます。多数のモダリティーをもったワクチンの中でどれがその条件を満たし、この未曾有の感染症から人類を救う救世主になるのか？大いに期待されるとともに、学問的にも非常に興味もたれるところだと思います。

6. おわりに-人獣共通感染症の制御における獣医師の役割

新興・再興する人獣共通感染症において、我々獣医師の果たす役割は、人間界に病原体が侵入する以前に、動物の段階でその感染を抑え込むことにあると思います。今回の新型コロナウイルスについては、残念ながら、動物の段階で感染の広がりを抑え込むだけの情報も時間もありませんでした。気が付いたときにはもうすでにヒト-ヒト感染に移行していました。しかし、これまで動物の段階で感染を制御することにより、ヒトでの被害を抑え込んできた疾病の事例もいくつもあります。古くはイヌの狂犬病およびブタの日本脳炎（いずれも動物に対するワクチン接種）、最近では、鶏卵を介したサルモネラ・エンテリティディス感染（ニワトリへのワクチン接種）、ニワトリ生体からのトリインフルエンザの感染およびブタからヒトへのニパウイルスの感染（いずれも感染動物の摘発淘汰）等です。今後も、地球温暖化による気候変動、森林破壊による地球環境の変化等により、これまで人類が遭遇したことのないような未知のウイルスや細菌が、いつなごとき人間界に侵入してくるかもしれません。我々獣医師ができることは、これらの病原体の動きをまず動物の段階で見出し、病気について調査・研究を行い、そしてその制御方法を見出すこと。つまり、未知の病原体が人間界へ侵入する以前に動物の段階で制御するという、非常に重要な使命を負っていると考えています。



研究室の“いま”

獣医生理学研究室/獣医生体システム科学研究室

同窓生のみなさんこんにちは。日暮泰男です。私は2017年4月に山口に来て、生理学研究室の助教をしている者です。この立場は、私の前には宇都宮大学の栗原望先生が、その前には県立広島大学の森大志先生が担当されていたのだと思います（森先生は助教授/准教授として）。生理学研究室は今では生体システム科学を名のっています。研究室の名前が変わった時期やいきさつは、私が来たときにはすでに生体システム科学になっていましたので、私は知りません。私は大学生としてはいわゆる文系の学部を卒業しましたので、獣医師ではありません。ですから、共同獣医学部のことも生理学/生体システム科学研究室のこともまだまだ勉強中ですが、今回は、2017年4月以降を中心に私が見たり聞いたりした研究室のできごとについて同窓生のみなさんにお伝えします。

研究室の現在の教員は、私と、教授の和田直己先生です。和田先生はかなり昔から長く山口におられるのだと思いますが、大学の定年は満65歳と規定されていますので、2022年度末に定年退職のご予定になるかと思います。学部生は合計5人、6年生が1人、5年生が2人、4年生が2人います。昨年度の同時期は合計4人、さらにその前年も合計4人でした。現在、共同獣医学部の研究室は20くらいあるようで、そして1学年の定員は30人です。単純に計算すると1研究室に配属されるのは1学年につき1.5人になりますので、2人配属されただけでも私はたくさん学生が来てくれたと思ってしまいます。私の卒業した大学は1学年の定員が130人くらいで、それを研究室数で割ると、1研究室に配属される平均の学生数は1学年につき4人か5人くらいになるのではないかと思います。このように研究室数に対する1学年の学生数の比が大きいこともあってか、特定の研究室への過度の集中が起こらないかぎり、学生は他の学生の動向に影響されることなく自分の希望する研究室に入ることができました。4年制の学部で、3年生から研究室に配属されます。私は10年ほど出身校の研究室にいつづけましたが、あまり学生からの人気がなく、2年に1度くらいのペースで1人も配属されない学年がありました。不幸中の幸いで学生数0人（つまり、3年生も4年生も0人）の年度は経験しましたが、1人だけの年度は2回か3回ほどあり、その時の学生がひどく気の毒でした。共同獣医学部の研究室配属のたびに私の出身校のできごとを思い出します。大学院生は社会人しながら大学院に在籍している方が数人おられるようです。

研究室の研究テーマは、私が勝手にまとめると、哺乳類のロコモーションに関する神経生理学、機能解剖学、運動および運動力学的研究で、ほとんど変わっていないと思います。現在の研究プロジェクトの中には学外の方に協力していただいているものがありますが、今年度は新型コロナウイルス感染症のためにそうしたものの多くが休止せざるを得ず、再開できる日が来ることをいつも祈っています。研究のさらなる詳細については、共同獣医学

部のガイドブックが学部の公式ウェブサイトダウンロードできますので、そちらをご覧くださいければと思います（編注：<http://www.vet.yamaguchi-u.ac.jp/>のバナー、「共同獣医学部のガイドブック」より）。この3年半の研究活動で印象深いのは、2019年3月から6月にかけて東京上野の国立科学博物館で開催された『大哺乳類展 2—みんなの生き残り作戦』という展覧会です。和田先生と研究室の学生が展示に協力されていました。私もたくさんの剥製と骨格標本からなるすばらしい展示を見せていただきました。展示場の出口付近に監修者として国立科学博物館の川田伸一郎博士と田島木綿子博士とともに、和田先生の紹介パネルが顔写真つきで掲示されていました。写真は共同獣医学部の公式ウェブサイトにもっているもので、左眼を縦に走る大きな切り傷が良い効果を生み、一部の来場者の方が動物の研究者っぽいと強く感じてくださったようで、ツイッターで多少バズったようです。研究以外で、研究室のメンバー全員で行うことは年に数回の飲み会くらいかと思います。2017年の年末には忘年会を周防大島の片添ヶ浜海浜公園のコテージに1泊して行いましたが、2018年と2019年には宿泊をとまなうイベントは行われていません（今年はどうなるかわかりません）。というわけで、私は一人で、ほぼ毎週金曜の夜に和田先生に教えてもらったおいしい小料理屋に行き、ビールを飲みながら、刺身を食べています。また、私個人の趣味みたいなものですが、毎年少なくとも1回、できるだけたくさんのメンバーに集まってもらって集合写真を撮り、研究室の記録として残すようにしています。

まとめると、この3年半では、定期的な学生の配属および卒業は当然あるにせよ、生理学/生体システム科学研究室はそんなに変わっていないと言えるかもしれません。ただ、それは、私が山口での新しい生活に慣れたり、門前の小僧なりに獣医学を理解しようとしたりすることに手一杯で、研究室のことをよく見てこなかったからである可能性もあります。和田先生は2年半後には退職されるご予定かと思いますが、そこで研究室に大きな変化があるかもしれません。研究室の雰囲気は、その研究室の中でいちばんえらい教員が誰であるかによって大きく変わってしまうのだと思います。新しい人をむかえた後に、研究室がどのような方向にすすんでいくのか予想もできません。もし、将来ふたたび同窓生のみなさんと私とで接点をもつ機会があれば、現在からその時までの生理学/生体システム科学研究室のできごとを今度こそきちんと記憶しておき、みなさんにしっかりお伝えさせていただきたいと思っています。

卒業生進路状況

国家試験結果

	第71回	第70回	第69回	第68回	第67回	第66回	第65回
	R1	H30	H29	H28	H27	H26	H25
受験者数	33	28	26	30	31	31	33
合格者数	28	27	26	26	26	28	27
合格率 [%]	84.8	96.4	100.0	86.7	83.9	90.3	81.8

令和元年度卒業生進路状況



令和元年度表彰者 表彰後に正門で

編集後記

名ばかりの会報編集委員で、今回も「かけ声」だけで、編集作業は全て上林先生にお願いしてしまいました。上林先生ありがとうございました。私は、人材育成事業を行う公益法人に所属し、県民の「環境学習」を支援する業務を担当しています。コロナ禍の中で、Webの活用を進めていますが、フィールドで行う自然観察会などは、五感を使う必要もあり、国や県のガイドラインに沿って対策をとりながら開催しているところです。集まっの意見交換が難しい中、「会報」も貴重なツールの一つです。会員の皆様からのご意見や投稿をお待ちしています。（酒井）

遅れに遅れまして申し訳ありません。今号も多くの先生方に支えられ、ようやく発行することができました。四苦八苦した割には去年と同じ様なレイアウトとなってしまう、やはり力不足を感じる次第です。編集・デザインに自信あり！あるいはやってみよう！という猛者の方のボランティアを常時募集しております！感想や改善案、企画のご提案なども大歓迎です。是非ご連絡ください！（上林）

青山会会報 第二号
2020年10月

編集担当
酒井 理 (V28)
上林 聡之 (V53)

山口大学共同獣医学部同窓会 青山会

事務局（代表：谷口 雅康）

〒753-8515 山口県山口市吉田 1677-1 山口大学共同獣医学部内 ☎ 083-933-5911

E-mail; vet-doso@yamaguchi-u.ac.jp Web; http://seizankai.vet.yamaguchi-u.ac.jp/